

## 民族間交流語・公用語から外国語へ？

—— キルギス共和国の言語教育におけるロシア語のゆくえ ——

小田桐 奈美

キーワード：キルギス，ロシア語，国家語，公用語

### 1. はじめに

ソ連解体以降，旧ソ連諸国におけるロシア語のゆくえが，多くの研究者の注目を集めている。なぜなら，ソ連時代に事実上の民族間交流語として普及したロシア語の地位の変容は，旧ソ連諸国の国内の政治状況や，ロシアとの政治的関係の重要な指標となるからである。多くの研究においては，現在各共和国において国家語である基幹民族語が定着するとともに，ロシア語の地位が低下しつつあることが指摘されている。

しかし，本稿が対象とする中央アジアのキルギス共和国を含めた一部の共和国では，国家語である基幹民族語の普及が難航し，ロシア語が今でもなお重要な位置を占め続けていることが指摘されている。その要因としては，国内のロシア語系マイノリティの存在や，ロシアとの強い政治・経済的関係が挙げられる。

だが，ソ連解体から約 20 年が経過した今，そしてグローバル化の現在において，言語をめぐる状況は国内や旧ソ連圏内の要因だけでは規定されなくなっている。そのような状況の下，キルギス共和国におけるロシア語の位置づけはどのように変容しつつあるのだろうか。

本稿では，キルギス共和国における言語教育を事例とし，その複雑なあり様を明らかにしながら，同国の言語教育制度におけるロシア語の位置づけの変遷を考察したい。

### 2. キルギス共和国における言語状況の複雑性

本論に入る前に，キルギス共和国の複雑な言語状況を明らかにしておこう。キルギス共和国において何らかの法的地位を持つのは，キルギス語<sup>1</sup>とロシア語の二言語である。キルギス語は，独立に先立つ 1989 年に「国家語」として制定された。一方，ロシア語は独立後の 2000 年に「公用語」として定められた。

国家語と公用語がどのように異なるのかについては，意見の分かれるところである。言語法上では，いずれの言語も社会・国家活動の全ての領域において使用される言語とされており，一見違いは無いように思える。だが，国家語は同時に国家の象徴や基盤としても位置づけられている。さらに，公用語が使用される範囲は，国家語の範囲を超えない程度に限定されること

<sup>1</sup> キルギス語は，テュルク諸語の北西グループに属し，キルギス共和国の他にウズベキスタン，タジキスタンなどで話され，480 万を越える話者を持つ。音声面，語彙面での差異から，北と南，または北，南西，南東の方言グループに分かれる (Орузбаева 1997: 286; Бялиев 2003: 4)。文字はキリル文字 (ロシア語 + 3 文字)。

堤正典・小林潔編『ロシア語学とロシア語教育Ⅲ』神奈川大学ユーラシア研究センター，2011 年，pp. 65-71。  
Masanori TSUTSUMI and Kiyoshi KOBAYASHI (eds.) *Russian Linguistics and Language Education*. III.  
Yokohama: The Eurasia Research Centre Kanagawa University, 2011, pp. 65-71.

が定められている。このように、法的には国家語であるキルギス語と公用語であるロシア語の序列が明確に定められており、キルギス語が上位に位置づけられている。

だが、言語の地位は法的地位のみによって判断できるものではない。特定の言語の地位を判断する際は、法的地位ばかりではなく事実上の地位も考慮に入れる必要がある。事実上の地位とは、話者数や実際の言語使用等から測定されるものであり、目には見えにくいものである。

ここで、それぞれの言語の話者数を見てみよう（以下、統計データに関して 2009 年国勢調査の結果を用いる）。キルギス共和国の人口は 5,362,793 人であり、上位 3 民族の人口構成は以下の通りである。キルギス人（キルギス民族に所属する人、71.0%）、ウズベク人（14.3%）、ロシア人（7.8%）。上位 3 民族以外にも 100 近くの民族が居住している。総人口中、キルギス語を「習得」しているのは約 76.5%である。このうち、「母語」として習得しているのは 71.4%で（ほとんどがキルギス人）、第二・第三言語として習得しているのは総人口の約 5%にとどまっている。ロシア語に関しては、総人口の 48.3%が習得している。このうち、母語として習得しているのは 9%、母語以外として習得しているのは 39%である。民族別にみると、キルギス人の 45%、ウズベク人の 26%、及び他の民族グループの大部分（カザフ人の 70%、ウクライナ人の 97%）が母語または第二言語としてロシア語を習得している。以上の結果から、キルギス語を第二言語として習得する人がごくわずかである一方、ロシア語は第二言語として広く習得されていることがわかる。

このように、国勢調査の結果は回答者の自己判断に拠るところが大きいという問題はあるが、統計上は国民の大部分がキルギス語を習得していることになる。しかし、キルギス語の使用は主にキルギス人によるもので、地方や特定の領域に限定されていると言わざるを得ない。首都や公的な場、マスメディア、出版、学術の領域では依然としてロシア語が優勢である。以上のようなことから、キルギス語とロシア語のどちらが優勢であるかは、容易に判断できないのである。

### 3. 言語教育の現状

キルギス共和国は多民族・多言語国家であり、言語政策を通してこの複雑な言語状況をどのように管理していくのかが、民族間関係の安定や国民統合に関わる重要な課題となっている。その言語政策の実施においては、言語教育が決定的な役割を果たす。なぜなら、言語教育こそが国家の言語政策を実行に移す仕組みとして機能するからである。具体的には、どの言語を、いつから、誰に対して教えるのか、それは必修であるのか、といった意思決定が行われる (Shohamy 2006)。

また、言語教育は民族間関係や国民統合といった問題によってのみ規定されるものではない。特定の言語を習得することが国内外における社会的・経済的成功と直結するため、言語の実用性の側面も大いに影響を与える。

このように、言語教育は様々な思惑が交差し、衝突する場であると捉えることができるのだ。

以下では、キルギス共和国における言語教育の現状を、科目と教授言語の観点から論じていく。

### 3.1 科目

ソ連時代、ロシア語が民族を問わず広く習得されていった一方、キルギス語はキルギス人以外に広く習得されることは無かった。しかし、キルギス語の国家語化以降、キルギス語は国民の言語として位置づけられ、国民にどのように習得させるかが重要な課題となった。

1989年の言語法では、キルギス語は教育における主要な言語として位置づけられた。そして、ロシア語または他の言語を教授言語とする教育機関においても、キルギス語学習が保障されることが確認された。

例えば、2008/2009年度の教育計画によると、ロシア語学校（ロシア語を教授言語とする学校。以下、他の言語についても同様。）では第1～第4学年でキルギス語が週3～4時間、第5～第9学年でキルギス語週2～3時間、キルギス文学1時間、そして第10・11学年ではキルギス語週2時間、キルギス文学週1時間が教えられている。さらに、ウズベク語やタジク語学校等においても、時間数は若干異なるが同様にキルギス語が教えられている。このように、キルギス語学校以外においてもキルギス語が必修科目となっており、どの教授言語を選択しようとも国民全員がキルギス語を学習する仕組みになっている。

一方、ロシア語もキルギス語学校において必修科目として学習され続けた。例えば、キルギス語学校では第1～第4学年でロシア語が週3～4時間、第5～第9学年でロシア語週1～2時間、ロシア文学2時間、そして第10・11学年ではロシア語週1～2時間、ロシア文学週2時間が教えられている（2008/2009年度）。

このように、実際は全ての子どもたちが教授言語に関わらずキルギス語とロシア語を学ぶ仕組みになっている。だが、近年の教育法におけるロシア語に関する規定の変化は注目に値する。2002年の教育法では、「全ての教育機関において、キルギス語、ロシア語、および外国語から一言語を必修科目として学習する（第5条・抄訳）」と規定されていた（下線部筆者）。一方、2007年の教育法では「国家は、各国民が就学前教育段階から義務教育段階まで、国家語と二つの外国語を学習する条件を整える（第6条・抄訳）」と変更された（下線部筆者）。

このように、言語教育においては事実上キルギス語とロシア語の二言語が大きな柱となっている。しかし、近年教育法上においてロシア語はその他の外国語に含まれることとなったのである。今後、この位置づけがどのように変化していくのか注目に値する。

### 3.2 教授言語

教授言語をどの言語にするかの選択は、ある言語を科目として学習するよりも、言語能力の獲得により大きな影響を与えると考えられる。教授言語の選択のしくみは独立後もソ連時代のものが維持され、キルギス語、ロシア語、そしてウズベク語やタジク語等を教授言語とする学校が存在し、その選択は親の自由となっている。

独立後の変化としては、教授言語としてのキルギス語の重要性が高まったことが指摘できる。1992年までにキルギス語学校は10.2%増加し、一方ロシア語学校は39.3%減少した (Landau & Kellner-Heinkele 2001: 210)。また、教育省のデータによると、独立前は首都ではわずか1校においてのみキルギス語で教育が行われていたのに対し、1999年には86校中58校においてキルギス語で教育を受けられるようになった (Korth 2005)。

だが、実際は単に法令によってロシア語学校がキルギス語学校へ変更されただけであり、教師の質やキルギス語の教科書の供給は確保されなかった。そのため、新たに生まれたキルギス語学校では、ソ連時代の教科書をそのまま使う場合や、以前使用していたロシア語の教科書をそのまま用いる場合もある (前掲書)。

高等教育機関においては、初等・中等教育よりもロシア語の役割がより大きい。確かに、独立以降は大学においてキルギス語で教育を受けるグループが導入され (前掲書)、キルギス語による大学入試も導入され、特に地方出身者にとって政府関係の仕事に就く可能性がより広がった。しかし、権威ある大学はロシア語を用い続け、それによってより多くの学生を得る結果になっている (Landau & Kellner-Heinkele 2001)。

高等教育段階においてロシア語で授業を受ける学生の割合は、2002/2003年度において全体の約67%を占めている (キルギス共和国国立統計委員会 2003)。初等・中等教育段階においては、ロシア語学校及びロシア語併用学校で学んだ生徒は約36%であることを踏まえると、高等教育段階ではロシア語で学ぶ学生が増加していることが分かる。これは、キルギス語学校出身の生徒が、大学から教授言語をロシア語に切り替える場合もあることを意味する。その場合、主に地方のキルギス語学校出身の学生が、ロシア語能力の不足から学習上苦勞することも多い (2008年筆者実施のインタビューより)。

また、キルギス人の中でもロシア語を教授言語とする者の割合が高いということが指摘できる。2002/2003年度では、高等教育機関に在籍するキルギス人の約半数がロシア語を教授言語としている。このように、教育の場においては未だロシア語は権威ある言語であり続けている。

さらに注目すべきは、以上のようなキルギス語とロシア語を中心としたせめぎ合いに加え、現在は教授言語の多様化が見られることである。キルギス共和国には、海外の政府や基金からの出資によって設立・運営されている学校や大学が存在する (キルギス・トルコ・マナス大学、中央アジア・アメリカ大学など)。概して、それらの学校は質の高い教育を提供していると考えられており、高い人気を集めている。例えば、トルコ語学校に通う生徒の親は、トルコ語学校を選ぶ理由として、4つの言語 (英語、トルコ語、ロシア語、キルギス語) を学ぶことができることや、教育の質の高さなどを挙げている。また、生徒たちもトルコ語学校に通うことにより、将来はトルコの権威ある大学へ進学することや、トルコ系企業で働くチャンスが得られると考えている (Demir, Balci & Akkok 2000)。

このように、言語能力の獲得に大きな影響を与える教授言語の選択においては、キルギス語の役割が増しつつも、より地域間関係・国際関係において有利に働く言語の影響力が高まりつ

つある。

#### 4. おわりに

以上のように、ロシア語の社会的地位づけが未だ高いといわれるキルギス共和国においても、やはり教育制度におけるキルギス語の重要性が高まりつつある。キルギス語の普及の試みは、全国民に対しキルギス語の学習を課すこと、そしてキルギス語を教授言語とする学校を増やすことにより体现されようとしている。だが、その試みはロシア語系住民を中心とする他の住民の側からは、国家語の押し付けとして受け止められざるを得ない。そのため、教育法上は「外国語」に含まれつつも、ロシア語は事実上の必修科目として維持されている。さらに、科目としての学習よりもより言語能力に影響を与えると考えられる教授言語の選択においては、依然としてロシア語が優位な状況にある。しかし、近年はますます教授言語が多様化しており、トルコ語などの言語で学ぶことに将来の希望を見出す人々もいる。

2009年にキルギス語が国家語制定20周年を迎えた際、当時の大統領演説では「現代のグローバル化の時代では、多言語話者であることが求められる。たくさんの言語を知っていることは、経済的に有利に働くのみならず、精神的な豊かさにもつながる」と述べられた。このように多言語話者の育成が理想として掲げられる中、もちろんロシア語は欠かせない存在である。公用語の地位を持ち、かつ人々に事実上の民族間交流語として認識されているロシア語は、今後も社会において重要な位置を占めていくだろう。だが、それと同時に他の言語の勢力拡大により、その位置づけは相対的に低下しているといえるのではないだろうか。

#### 付記

本稿は平成22年度科学研究費補助金（特別研究員奨励費）による研究成果の一部である。

#### 参考文献

キルギス共和国統計委員ホームページ <http://www.stat.kg/> (2011/2/28 最終閲覧)

キルギス共和国普通教育機関教育計画 (2008/2009年)

Биялиев, К. А 2003 *Кыргызский Язык*. Бишкек.

Закон Кыргызской Республики 2002, 2007 «Об образовании».

Закон Кыргызской Республики 25 мая, 2000 года «Об официальном языке Кыргызской Республики»,

Закон Кыргызской ССР 23 декабря, 1989 года «О государственном языке Киргизской ССР»,.

Кыргыз Республикасынын Улуттук статистикалык комитети 2003 *Кыргыз*

*Республикасындагы Вилим беруу жана Илим*, Бишкек. (キルギス共和国統計委員会 (2003))

- Орузбаева, Бюбийна 1997 Киргизский Язык. Институт Языкознания РАН *Языки мира*—  
*Тюркские Языки*. Бишкек: Издательский Дом «Кыргызстан».
- Demir, Cennet Engin, Balci, Ayse and Akkok, Fusun 2000 “The role of Turkish schools in the educational system and social transformation of Central Asian countries: the case of Turkmenistan and Kyrgyzstan,” *Central Asian Survey*, Vol. 19, No, 1, pp. 141-155.
- Korth, Britta 2005 *Language Attitudes Towards Kyrgyz and Russian*. Peter Lang Publications.
- Landau, Jacob & Kellner-Heinkele, Barbara 2001 *Politics of Language in the ex-Soviet Muslim States*. London: Hurst and company.
- Shohamy, Elana 2006 *Language Policy: Hidden Agendas and New Approaches*, Routledge.

## 民族間交流語・公用語から外国語へ？

—— キルギス共和国の言語教育におけるロシア語のゆくえ ——

小田桐 奈美

中央アジアのキルギス共和国を含めた一部の共和国では、国家語である基幹民族語の普及が難航し、ロシア語が今でもなお重要な位置を占め続けていることが指摘されている。だが、ソ連解体から約 20 年が経過した今、そしてグローバル化の現在において、言語をめぐる状況は国内や旧ソ連圏内の要因だけでは規定されなくなっている。キルギス共和国の言語教育制度におけるロシア語の位置づけを見てみたい。

科目として実際は、全ての子どもたちが教授言語に関わらずキルギス語とロシア語を学ぶ仕組みになっている。しかし、近年教育法上においてロシア語はその他の外国語に含まれることとなった。

教授言語としては、独立後、キルギス語の重要性が高まった。しかし高等教育機関においては、初等・中等教育よりも依然としてロシア語の役割がより大きい。一方で、近年はますます教授言語が多様化しており、トルコ語などの言語で学ぶことに将来の希望を見出す人々もいる。キルギス語の役割が増しつつも、より地域間関係・国際関係において有利に働く言語の影響力が高まりつつある。